様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　４ 月 ２８ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０２９０１

研究課題名（和文）日本におけるインドネシア語応用教材の研究と開発および教材バンクの拡張

研究課題名（英文）Research for Advanced Materials for Indonesian Education and Development of Material Bank

研究代表者
森山　幹弘（MORIYAMA, Mikihiro）

南山大学・国際教養学部・教授

研究者番号：５０２９８４９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：様々な媒体のインドネシア語使用例を体系的に収集し、データベース化し、言語学的な分析を行った。さらに、策定した応用教材の企画案にそってデータベースから適切な素材を選び、日本の教育機関で共通に使用できる応用教材に向けて具体的な成果物をデザインすることができた。具体的な本研究の成果としては、日刊紙KOMPASの記事を対象に、『基本文法』の項目ごとに頻度、意味、語形成、文型、共起する語などの点から用例を収集し、この作業の中で主に (1)インドネシア語研究の新たな視点の獲得　(2)用例の選定基準の方向性　(3)『基本文法』の記述と用例の再検討の必要性 についての知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、日本のインドネシア語教育全体の発展を促すことであり、教材に焦点をあて、教員が用いる共通教材の開発によってその発展に寄与するところにある。日本のインドネシア語教育の改善を図るとともに、インドネシア語教育全体の問題の共有を促し、インドネシア語教育とインドネシア語研究の議論を活発にする。基本教材と教材バンク基礎編の開発に続き、それとリンクした応用教材と教材バンク応用編が開発されることによって、初めて日本の標準的・規範的なインドネシア語教育を行う体系的な教材基盤ができることである。また構築されたインドネシア語データベースは、インドネシア語研究と教育の研究資源を提供することができる。

研究成果の概要（英文）：This research has succeeded to systematically collect a number of sentences in which words are used in an actual manner. The selection of the words were based on the basic grammar which has been compiled some years ago. A data base consisted of the Indonesian newspaper KOMPAS for one year was used in order to collect the example sentences. A format of compilation of the usage of words was designed to show frequency, word formation, morphology, collocation and sentence patterns. An analysis of this research has revealed the following points: (1) a new point of Indonesian grammar from actual usage of words (2) an alternative criteria of selection for example of sentence (3) a need to review the description of 'basic grammar'.

研究分野：社会言語学

キーワード：言語学　外国語教育　インドネシア語　教材研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本におけるインドネシア語教育は長い歴史を持ち、現在もいくつかの大学が専攻として、あるいは第２外国語、第３外国語としてインドネシア語教育をカリキュラムに取り入れていることから、その重要性は明らかである。その一方で、日本においてインドネシア語教育に携わる専任教員の数は減少しており、各大学で学習者やカリキュラムに合わせた教材や教授法の開発に充てられる資源が不足している。そこで、インドネシア語教育の一つの規範的モデルとなるような内容と枠組みを持った教材を開発し、教員がその教材を共有してそれぞれの授業の内容や目的に合わせカスタマイズして利用できる「教材バンク」の創設を目指し、申請者の 3 名は次のような教材開発に関わる活動・研究を進めてきた。

第一段階では、学習者が慣れている英語や日本語の教育文法の用語や概念との対応等を考慮したインドネシア語の基礎的な文法項目を網羅した教育文法（以下『基本文法』）を記述した。文法の基本教材は、国内外の主要な文法書を主に参照し、その成果を還元する形で教育用に記述したものである。すなわち、研究文法ではなく、学習者が慣れている英語や日本語の教育文法の用語や概念との対応などを考慮した、初級から中・上級までを網羅した教育文法とした。語彙の基本教材については、頻度、分野、文化的な特殊性、日本との違いなどの観点から単語を選出し、目標語彙リストを作成した。それは、既存の語彙集や語彙の頻度に関する研究などをもとに、各段階 500 語の計４段階からなる具体的な目標を示した語彙教材である。また、文法の基本教材で見られる語彙とのリンクも考慮したものになっている。発音・文字は、文法と語彙から独立性が高い教材であるが、この分野ではアクセント、イントネーションの記述が含まれるため、形態論や統語論（ここでは語彙、文法の分野に相当する）との関連性を考慮した。また、インドネシア語と日本語の音韻構造の違いをふまえ、日本語話者にとって問題点を認識させるような教材とした。このように、基本教材を構成する３分野は相互にリンクしており、また、日本語話者がインドネシア語を学ぶ際の問題点をふまえたものとなっている。この基本教材を、インドネシア語教員が多くを占める日本インドネシア学会の会員に公開し、授業の内容や目的に合わせカスタマイズして利用してもらい意見を得ている（基盤研究(C)平成 25～27 年度「日本におけるインドネシア語教材の分析と教材バンクの創設」）。

このように、基本教材は完成したが、次の段階の応用教材が３つの理由から不可欠であると考えた。（１）基本教材の内容を定着させるための練習問題として必要性があること。（２）中・上級では、実際の言語使用の実例により多く触れ、４技能の能力を高めるための練習（読解、作文、聞き取り、会話、プレゼンテーションなど）の比重が高くなること。（３）習得目標である標準変種だけでなく、実際には使用頻度の高い口語変種、地域変種などの知識も身につけ、より実践的な言語能力を獲得することが期待されること。このように、基本教材を土台とした応用教材は大学レベルのインドネシア語教育の充実にとって非常に重要であるが、各大学の状況を見る限り、教科書などが用意されることなく、散発的に入手した「生きたインドネシア語」（ニュース、小説など）をそのまま使い、教授・習得目標が設定されないままで教育が行われているのが現状であった。そこで、応用教材において、どの技能を向上させるのか、どのような内容項目を習得することが目標なのかを考慮しながら、体系的に収集した豊富な実例をふまえ、素材を選び教材を作る必要があると考えた。そのためには十分なインドネシア語使用例を盛り込んだデータベースが必要であるが、これまで利用可能なものは存在しないため、その制作を目論んで研究を開始した。

２．研究の目的

本研究は上記の第一段階の研究成果に基づいて行う第二段階と位置付けることができるものであり、『基本文法』の記述において取り上げた文法項目及び例として取り上げた語が、実際の文の中でどのように使われているのかについて研究することを目的とした。その研究成果のアウトカムとしては、基本文法の項目ごとの用例集としてまとめることを目標とした。『基本文法』で例として採用した例文が果たして適切であったのか、ある語が文の中でどの語とどのように共起するのかなどについて、言語資料（コーパス）を用いて例文を収集した。その際にはコーパスデータを分析し用例を抽出するために、コンコーダンスソフトを用いることとした。

本研究の学術的な特色・独創的な点は、日本のインドネシア語教育全体の発展を目的としているというものである。具体的には、教材に焦点をあて、教員が用いる共通教材の開発によってその発展に寄与するところにある。それによって、各教育機関のインドネシア語教育の改善を図るとともに、日本のインドネシア語教育全体の問題の共有を促し、インドネシア語教育とインドネシア語研究の議論を活発にすることが可能になる。

予想される成果として、第一に、基本教材と教材バンク基礎編の開発に続き、それとリンクした応用教材と教材バンク応用編が開発されることによって、初めて日本の標準的・規範的なインドネシア語教育を行う体系的な教材基盤ができることである。それを各教育機関が共通教材として利用することで、日本全体でのインドネシア語教育の質的向上が見込まれる。第二に、応用教材開発の過程で構築するインドネシア語データベースは、インドネシア語研究のリソースとして利用でき、また、長年待望されている学習者用のインドネシア語–日本語辞書やインドネシア語活用辞典を開発するための見出し語と用例のリソースとして活用しうるインドネシア語研究およびインドネシア語教育の研究資源を提供することができる。

３．研究の方法

文法は文法規則のみで理解できるものではなく、練習問題や語句の用法の確認などを通じて定着を図る必要がある。教員がそれぞれの授業目的に合わせ、文法の理解定着や練習問題作成に利用できるような教材バンクを準備するために以下のような方法で研究を実施した。

(1)公開した基本教材（教材バンク基本編）をインドネシア語教員に使用してもらい、彼らへの使用結果に関するアンケートを行い、そのフィードバックをふまえ、基本教材の改訂を行う。

(2)本研究の応用教材に相当する国内外にある既存の教材を収集・分析し、それをふまえて、基本教材を土台とした応用教材の枠組みと内容を検討する。

(3)インドネシア語使用例のデータベースの構築を行う。新聞、雑誌、文学作品などの出版物を中心とする書記媒体とテレビ、ラジオ、インターネット上のニュースや番組などの音声・映像媒体の２種類の媒体から、フォーマルなインドネシア語（標準インドネシア語）を中心に収集し、その他にインフォーマルなインドネシア語（口語インドネシア語）、インドネシア語の地域変種の例を収集する。また、ワードリストやコンコーダンスを用いて形態素レベル、統語レベルの分析を行いながら、語例、文例を蓄積する。

(4)(1)と(2)をふまえ、(3)のデータベースに基づいた応用教材を開発し、教材バンク基本編と合わせ、公開を行う。

４．研究成果

当初の計画通り、様々な媒体のインドネシア語使用例を体系的に収集し、データベース化し、言語学的な分析を行うことができた。さらに、策定した応用教材の企画案にそってデータベースから適切な素材を選び、日本の教育機関で共通に使用できる応用教材に向けて具体的な成果物をデザインすることができた。現時点では、教材バンクの基礎編に次ぐ応用編としてインドネシア語教育関係者に向けて試験的に公開を準備している。

具体的な本研究の成果としては、日刊紙 KOMPAS の記事を対象に、『基本文法』の項目ごとに頻度、意味、語形成、文型、共起する語などの点から用例を収集し、考察することができた。この作業の中で得られた認識と課題として、主に次の３つをあげることができる。

(1) インドネシア語研究の新たな視点の獲得
(2) 用例の選定基準の方向性
(3) 『基本文法』の記述と用例の再検討の必要性

まず、(1)については、これまでの研究では、既存の言語研究の成果や文法書を参照し、規範的な文法について検討し、それを記述してきたが、コンコーダンスツールを用いることによって、実際に用いられている例を頻度、共起する語や文型などのいくつかの観点からある程度組織的に分類し、考察することが可能になった。その結果、規範に合致する例だけでなく、規範から外れるが許容されている例も見られることがわかり、また規範そのものや規範の範囲が変化している可能性も見えてきた。言語研究および言語教育において、規範と実践のどちらか一方のみを見ていては不十分であり、インドネシア語に関しても同じことが言える。コンコーダンスツールによって、規範と対照しながら実例を詳細に観察するという重要性を新たに認識することができた。

(2)の気づきは、１つめと関連している。上記の気づきの結果、これまで『基本文法』での記述は、既存の文法書の記述と規範に引きずられており、必ずしも実際の使用を反映していないことがわかった。つまり、規範のみにとらわれていた「思い込み」を修正し、文法記述や用例は、規範と実践の両方を考慮する必要があるという認識を得た。そのため、現在編纂を計画している用例集の用例の選定には、使用頻度の高さを考慮する必要がある。また、その用例は、文の長さや使用語句など多少変える必要があるが、できる限り実例に基づくべきである。

最後の(3)で示したように、すでに試用版を作成済みの『基本文法』の記述内容や文例を再検討する必要性があげられる。コンコーダンスツールによって実例を詳細に考察するという上述の作業を行う中で、各文法事項の記述内容および文例とのずれが見られ、修正をすべき必要が出てきている。

以上の３点から導かれることは、用例集の編集は規範と実践のバランスを考慮しながら、できるだけ実際の使用を反映したものにするということである。ただし、教育で用いる文法や用例であるため、内容やレベルといった、それに見合った配慮も必要である。

さらに課題として見えてきたことは、コーパスの分野や文体の偏りである。これまでの研究で材料としてきたのは日刊紙のコンパスだけであり、しばしば、用いられる語や文型、語順などの点で見られる特徴がジャーナリスティックな文体だからではないかと思われる場合があった。したがって、分野や文体に偏りがないように、今後使用するコーパスには、別の分野や文体のものを加えることが望ましい。例えば、小説などの文学作品が考えられる。しかしながら、理想を目指し、コーパスを大きくし、多種多様になればなるほど、コンコーダンスを利用する作業にはますます莫大な時間と労力が必要となってくる。際限のない作業に対して、何らかの基準を設けて効率化を図ることも必要である。

最後に、この共同研究が開始して以降ずっと課題として意識されてきたこととして、記述の仕方の不統一がある。現在行っている作業については、用例の記述と提示の仕方の統一が問題となっている。長期かつ莫大な作業に基づく研究のアウトプットとして記述する場合に、まず共同研究者間の認識をすり合わせる必要がある。次にはその共通の認識と理解をどのような用語で表現し、どのような提示の仕方で行うのかについて統一する必要がある。これまでは作業の完遂を優先してきたために用語と記述の仕方がバラバラになっており、その統一をしなければならない。その際にも、あくまでも教育的な観点を念頭においた記述を行うことを第一に考え、かつ基本文法を学んだ学習者を念頭においた中級レベルの教材、つまり応用教材を提供することを意識しておく必要がある。

本研究を通じて多くの課題が明らかになってきたが、それはインドネシア語教材研究が深化したからこそと考えることができ、研究の成果が蓄積されてきていると言える。上記の課題を克服していきながら、すでに発表した基本教材に続き、それに即した応用教材としてとして「インドネシア語用例集」を完成させる予定である。基本教材の時と同様に、今回もまずは試行版として日本インドネシア学会などの会員に限り公開し、会員からの批判をいただき継続的に修正を施していきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 FURIHATA, Masashi	４．巻 1
２．論文標題 Dilema antara Desakan Standardisasi Bipa dan Praktik Pengajaran	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Prosiding Konferensi Internasional Pengajaran Bahasa Indonesia bagi Penutur Asing (KIPBIPA) XI	６．最初と最後の頁 26-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Moriyama Mikihiro	４．巻 9
２．論文標題 CHANGING LIFE VALUE AND DEMOGRAPHIC CHANGE IN CONTEMPORARY JAPANESE SOCIETY	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Paradigma: Jurnal Kajian Budaya	６．最初と最後の頁 178～178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17510/paradigma.v9i2.343	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Mikihiro Moriyama	４．巻 18(1)
２．論文標題 Print culture in Sundanese for 100 years in the Dutch East Indies	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Jurnal Pendidikan Bahasa dan Sastra	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 FURIHATA, Masashi	４．巻 24
２．論文標題 An Analysis of Pitch Movement of Sentences with Topic Markers in Sundanese	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東京外大東南アジア学	６．最初と最後の頁 80-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原真由子、森山幹弘、降幡正志	4．巻 23
2．論文標題 インドネシア語基本文法の記述：教材作成のための共同研究からの報告	5．発行年 2017年
3．雑誌名 インドネシア　言語と文化	6．最初と最後の頁 7-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原真由子	4．巻 43
2．論文標題 バリ語とインドネシア語コード混在会話におけるバリ語nggih, kenten, nikaの機能	5．発行年 2017年
3．雑誌名 南方文化	6．最初と最後の頁 53-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 降幡正志	4．巻 第21号
2．論文標題 インドネシア語の情報構造と名詞述語文	5．発行年 2016年
3．雑誌名 語学研究所論集	6．最初と最後の頁 191-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 FURIHATA, Masashi	4．巻 -
2．論文標題 On the Syntactic Function of Particles -lah and -kah in Indonesian Based on a Desriptive Analysis	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Buku Kumpulan Makalah Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia (KIMLI)	6．最初と最後の頁 257-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原真由子	4．巻 22
2．論文標題 バリ語とインドネシア語コード混在会話におけるバリ語nggih, kenten, nikaの機能	5．発行年 2016年
3．雑誌名 インドネシア　言語と文化	6．最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 降幡正志	4．巻 26
2．論文標題 インドネシア語の情報構造に関するいくつかの事象	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東京外大東南アジア学	6．最初と最後の頁 97-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 降幡正志、原真由子、森山幹弘	4．巻 26
2．論文標題 インドネシア語応用教材に関する共同研究からの報告	5．発行年 2020年
3．雑誌名 インドネシア　言語と文化	6．最初と最後の頁 105-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計34件（うち招待講演　20件／うち国際学会　16件）

1．発表者名 FURIHATA, Masashi
2．発表標題 On the Particle tea in Sundanese
3．学会等名 The Seventh International Symposium On The Languages Of Java (Isloj 7)（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 降幡正志
２．発表標題 標準インドネシア語とインドネシア語教育
３．学会等名 「マレー語方言の変異の研究」研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 FURIHATA, Masashi
２．発表標題 Dilema antara Desakan Standardisasi (BIPA) dan Praktik Pengajaran
３．学会等名 11th International Conference on Teaching of Indonesian to the Speakers of Other Language. INCULS（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 森山幹弘，降幡正志，原真由子
２．発表標題 インドネシア語応用教材に関する共同研究からの報告
３．学会等名 日本インドネシア学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 原真由子
２．発表標題 インドネシア語の『今でしょ！』：sekarang sajaとsekarang juga
３．学会等名 第２回OSIPフォーラム
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Vanishing Village Communities in Japanese Society
３．学会等名 The 20th Tonalestate（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Colonial Print Culture: Sundanese book publishing in the early twentieth century in the Dutch East Indies
３．学会等名 International Workshop “The Construction of Indonesian Knowledge Cultures Since Independence”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Masyarakat Multilingual dan Kebijakan Bahasa di Indonesia
３．学会等名 Kongres Bahasa Indonesia XI（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Pengajaran BIPA di Jepang: dari sudut pandang lintas budaya
３．学会等名 International Seminar on Cultural Literacy in Language, Art, and Literature Education, Faculty of Languages and Arts（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 FURIHATA, Masashi
２．発表標題 Partikel ‘wa’ dalam Bahasa Jepang dari Segi Studi Kontrastif dengan Bahasa Indonesia dan Bahasa Sunda
３．学会等名 Simposium Peringatan 60 Tahun Hubungan Diplomatik Indonesia-Jepang: “Peran Akademisi dalam Peningkatan Interaksi Budaya（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hara, Mayuko
２．発表標題 Unsur Penegasan dan Pemfokusan (Toritate) dalam Bahasa Indonesia
３．学会等名 Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 原真由子
２．発表標題 インドネシア語のsajaは『だけ』だけ？
３．学会等名 OSIP記念フォーラム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hara Mayuko
２．発表標題 Masalah materi pengajaran bahasa Indonesia di Universitas di Jepang dan tindakan lanjutannya
３．学会等名 Simposium Internasional Pengajaran Bahasa Indonesia bagi Penutur Asing (BIPA)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hara Mayuko
２．発表標題 “Honorifics” in the usage of personal pronouns and terms of address in the Bali Aga dialect
３．学会等名 The 1st International Conference on Local Languages--Empowerment and Preservation of Local Languages（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Pengajaran Bahasa Indonesia di Jepang: Pelaksanaan dan Masalahnya
３．学会等名 Workshop Pengajaran Bahasa Indonesia bagi Pengajar dan Pegiat Bahasa Indonesia di Jepang（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Print culture in Sundanese for 100 years in the Dutch East Indies
３．学会等名 1st UPI International Conference on Language, Literature, Culture, and Education（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Demographic Change and its Impact on Contemporary Japanese Society
３．学会等名 International Postgraduate Conference on Social and Political Issues, Faculty of Social and Political Sciences, Universitas Indonesia（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 110 tahun pembelajaran Bahasa Melayu di Jepun: suatu sejarah persahabatan antara Malaysia dan Jepun
３．学会等名 Annual ECoFl Symposium, Issues in Economics, Finance and Banking: Past, Present and Future, Universiti Utara Malayasia（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Metodologi Penelitian Etnografi
３．学会等名 Faculty of Humanities, Universitas Pendidikan Indonesia（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 森山幹弘、原真由子、降幡正志
２．発表標題 インドネシア語基本文法の記述：教材作成のための共同研究からの報告
３．学会等名 日本インドネシア学会　第47回研究報告大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 MORIYAMA, Mikihiro
２．発表標題 ‘Sejarah Pembelajaran Bahasa Melayu di Jepun’ [A History of Malay Learning in Japan],
３．学会等名 Public lecture at Malay Language Centre of Singapore, siri ceramah Arif Budiman 13（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 FURIHATA, Masashi
２．発表標題 Tinjauan tentang Fungsi Sintaktik Partikel -lah dan -kah dalam Bahasa Indonesia Berdasarkan Analisis Deskriptif
３．学会等名 Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia (KIMLI)（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 FURIHATA, Masashi
２．発表標題 Why Is the Sundanese Particle mah used in Spoken Indonesian? : The Importance of Information Structure
３．学会等名 Maranatha International Conference on Language, Literature, and Culture（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 HARA, Mayuko
２．発表標題 Masalah dalam pengajaran bahasa Indonesia di universitas di Jepang dan tindak lanjutannya
３．学会等名 Simposium Internasional --- Peningkatan Pemahaman Pendidikan dan Penelitian Keindonesiaan dan Kejepangan guna Mempererat Hubungan Kedua Negara（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Hara Mayuko
２．発表標題 Laporan perkulihan kemahiran bahasa Indonesia secara daring di Universitas Osaka
３．学会等名 Seminar Tahunan APPBIPA Cabang Jepang 2020 (on-line)
４．発表年 2020年

１．発表者名 原真由子
２．発表標題 インドネシア語のとりたて表現
３．学会等名 国立国語研究所 Prosody and Grammar Festa 5 (on-line)
４．発表年 2021年

１．発表者名 降幡正志
２．発表標題 インドネシア語の情報構造
３．学会等名 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会（on-line）
４．発表年 2020年

１．発表者名 降幡正志
２．発表標題 スンダ語の研究に関する覚え書き
３．学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター夏季セミナー2020.　（オンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 降幡正志
２．発表標題 インドネシア語とスンダ語の情報構造について
３．学会等名 インドネシア日本語教育学会第2回国際研究大会　（オンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Strategi peningkatan fungsi Bahasa Indonesia sebagai bahasa Internasional (Strategy for enhancing the function of Indonesian as international language)
３．学会等名 Kuliah Umum On-Line Lecture, Fakultas Pendidikan Bahasa dan Sastra, Universitas Pendidikan Indonesia（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Lifting the Local to the Global Institution
３．学会等名 Webinar Series “From West Java to the World: Accelerating Strategy in Internationalization of Universitas Padjadjaran toward World Class University”, Universitas Padjadjaran（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Budaya Cetak Buku basa Sunda dalam Kelindan Lokal dan Global (Sundanese culture of book printing in the tread between Local and Global)
３．学会等名 Seminar Daring Sastra dan Kajian Budaya (On-line Seminar of Literature and Culture) Dies Natalis ke-62 Fakultas Ilmu Budaya, Universitas Padjadjaran（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Character education and ethnic values in Sundanese Region, West Java
３．学会等名 Visual Journey: Experience West Java Culture, Institute of Technology Bandung（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mikihiro Moriyama
２．発表標題 Bahasa menunjukkan bangsa: suatu pandangan dalam pembelajaran bahasa asing dan bahasa nasional (Language represent ethnicity: a view of learning and teaching foreign language and national language)
３．学会等名 Sedaring Internasional Riksa Bahasa XIV (The 14th On-line International Seminar of Promotion Language), Universitas Pendidikan Indonesia（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計9件

１．著者名 原真由子	４．発行年 2019年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 360
３．書名 日本語と世界の言語のとりたて表現	

１．著者名 Mikihiro Moriyama	４．発行年 2019年
２．出版社 De Gruyter	５．総ページ数 194
３．書名 Rapport and the Discursive Co-Construction of Social Relations in Fieldwork Encounters	

１．著者名 Mikihiro Moriyama	４．発行年 2020年
２．出版社 Malay Language Centre of Singapore; Academy of Singapore Teachers; Singapore Ministry of Education	５．総ページ数 160
３．書名 Siri Ceramah Arif Budiman Vol. 4	

1．著者名 森山幹弘、柏村彰夫、稲垣和也	4．発行年 2018年
2．出版社 三元社	5．総ページ数 280 p.
3．書名 ワークブック　インドネシア語　第1巻、第2巻、第3巻	

1．著者名 Mikihiro Moriyama	4．発行年 2017年
2．出版社 PT Balai Pustaka	5．総ページ数 168
3．書名 100 tahun Balai Pustaka (1917-2017): Membangun Peradaban Bangsa	

1．著者名 Mikihiro Moriyama	4．発行年 2018年
2．出版社 Routledge Taylor & Francis Group	5．総ページ数 930
3．書名 Cultural Dynamics in a Globalized World	

1．著者名 降幡　正志、原　真由子	4．発行年 2017年
2．出版社 白水社	5．総ページ数 150
3．書名 ニューエクスプレス　インドネシア語《CD付》	

1．著者名 降幡　正志、原　真由子	4．発行年 2020年
2．出版社 白水社	5．総ページ数 162
3．書名 ニューエクスプレスプラス　インドネシア語《CD付》	

1．著者名 Mikihiro Moriyama	4．発行年 2021年
2．出版社 Nova Science Publishers	5．総ページ数 371
3．書名 in Fuad Abdul Hamied ed., Literacies, Culture and Society towards Industrial Revolutions 4.0: reviewing Policies, Expanding Research, Enriching Practives in Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	原　真由子 (HARA Mayuko) (20389563)	大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・教授 (14401)	
研究分担者	降幡　正志 (FURIHATA Masashi) (40323729)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関